

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての の考察：編物を中心とする物質文化研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5603

北太平洋沿岸地域における 植物性繊維製品についての考察

—— 編物を中心とする物質文化研究 ——

齋 藤 玲 子*

A Perspective Study on Weaving Plant Fiber on the North Pacific Rim: Material Culture on Basketry

Reiko SAITO

Northern Peoples depended almost entirely on natural resources to make their daily necessities. Especially the processing of animal skin and plant fiber were the main activities of women.

It has been considered that the weaving culture developed on the North Pacific Rim. The reason first of all is that the rich vegetation in the area enabled them to gather enough materials for weaving. Secondly, baskets and mats were convenient for gathering, carrying, drying and storing food such as fish and plant. Women and elders had a comparatively important role in the subsistence of their environment where gathering food resources were abundant. Intensive seasonal gathering activities enabled women to weave in a system where there was division of labor in each family. Jochelson mentioned that the Maritime Koryak had an advantage to weave baskets in contrast with the case of the Reindeer Koryak where they could not weave baskets in their migratory pastoral life. The Reindeer Koryak obtained baskets by exchange from the Maritime tribe. This may suggest that the cultural condition of basketry depended on the difference between the sedentary and the nomadic life.

* 北海道立北方民族博物館学芸員

キーワード 植物性繊維、編物、バスケット細工、北太平洋沿岸地域、女性の役割、物質文化
Key Words Plant Fiber, Weaving, Basketry, North Pacific Rim, Women's role, Material Culture

Weaving was women's work in winter throughout the North. Moreover gathering and processing these materials were conducted in their most suitable time of their subsistence cycle not in the busy fishing season. These may indicate that the development of weaving had a deeper relationship with the total work load in connection with their subsistence and sexual division of labor than the condition of obtainability of materials or the transmission of techniques.

Also their botanical information about food and medicine are greatly indebted to women. This paper would like to consider the women's role from the viewpoint of material culture and botanical knowledge (plantlore).

はじめに

北方地域における物を作る素材の大部分は、当然のことながら、動植物を中心とした自然物である。住居や船など大形のものや狩猟・漁撈具など生業に関わる道具と儀礼具を作るのは主に男性の仕事であったが、衣類をはじめ、袋、籠などの日用品を作るのは女性の仕事であった。素材では、木や骨・牙・角などの堅い素材を切ったり彫ったりするのが男性の領分で、毛皮革や草・樹皮・小枝・根などの柔らかな繊維質の素材が女性の領分であると一般的にいえるだろう。

動物の毛皮革は、保温性・防水性・耐久性・強度と可塑性を兼ね備えており、北方の環境にあったさまざまな物を作る素材として有用であった。この毛皮革の利用と製革の技術については、これまでにおおまかではあるが概観してきた。それは、その地域で得られる獲物と自然環境（温度や湿度など）と生活様式によく適応していて、極北地域ではアザラシ皮とトナカイ皮の補完的でバランスのとれた利用と比較的単純な製革方法が、亜極北地域ではシカ類の皮の利用と質の良いレザーを作るための複雑な製革方法が、一般的特徴として見られた [Saito 1995]。

一方、植物性の素材も、少なからず重要な役割を果たしているように思われる。木器や大形の住居・船など以外に、植物の繊維を糸にしたりバスケットなどの植物性繊維製品を作ることは、毛皮革の取扱いとならんで女性の仕事の大きな部分を占めている。北方地域の物質文化のなかで、毛皮革と対称的な位置にある編織物を中心とした植物性繊維製品の概要をつかむことができれば、女性の携わる物質文化のかなりの部分を把握することができると考えられる。

また、物を作る素材としてだけではなく、食用や薬用として使われるにしても、植物の採集は主に女性の仕事であり、植物に関する知識は女性に負うところが大きいと考えられる。北方地域の生業活動において軽視されがちな採集活動に関わる女性の役割を、植物と

の関わりの中なかで考察する手掛かりともしたい。

北方地域の植物性繊維製品を比較研究するとき、なぜ北太平洋沿岸地域を対象としたかという、まず植生との関係がある。北米では西岸海洋性気候で、ヘムロック(ツガ属)、ファー(トガサワラ属)、スプルース(トウヒ属)、イエロー・シーダー(ヒノキ属)、レッド・シーダー(ツガ属)などの針葉樹が森を形成しており、ポプラやハンノキなども川岸に生えている。シラカバ類は、本土のほんの少しの限られた場所にしか生えていない[Suttles 1990: 21]。アリューシャンでは風が強いため木が生えないツンドラ地帯であるが、湿潤な海洋性気候で気温変化が少なく、灌木や草本は少なくない[ラフリン 1986]。カムチャツカでも海岸側は北海道と同じ冷帯湿潤気候に区分され、グイマツやハイマツとポプラの仲間、ダケカンバなどの数種のシラカバ類とハンノキなどが生えている[Jochelson 1905-08: 399]。北海道はいうまでもなく、針広混交林帯である。これらの地域では極北のツンドラや内陸とは異なり比較的植生には恵まれる一方、北海道や南カムチャツカを除いてはシラカバ類の樹皮はあまり採れない。素材の入手から考えて、この地域が植物性繊維製品を発達させてきたことは当然のことともいえる。編織物のなかでも特にバスケット類、つまり籠細工や編み袋などを多用する文化が連続していることは、今までにも指摘されることはあったが、日本ではこのことについての論文はあまり知られていない。

アイヌや北西海岸インディアンでは、衣類として樹皮・草皮製織物と毛織物などの織物の利用が見られるが、編むという技術は、織物より普遍的で先行する技術と考えられている[吉本 1987: 23]。寒冷な北方地域において編織物は防寒性では毛皮革に劣り、衣類や敷物などとしての重要性はさほど高くないように考えられがちだが、この地域のバスケットの精緻さは世界のなかでも有数であるといわれる[Rose 1983]。北方地域のなかでも、なぜ北太平洋沿岸に連続して編織物が発達したのだろうか。

ここでは、北太平洋沿岸地域を中心に、必要に応じてその隣接地域も比較検討をしながら製品の種別、素材、採集と加工について、いくつかの民族誌から関係部分を抽出して比較し、植物性繊維製品の在り方とその背景について若干の考察を試みたい。

1. 植物性繊維製品の定義

本論で対象とする「植物性繊維製品」とは、木本および草本類の樹皮・茎・葉・根などそのままあるいは細く裂いたもの、またはそれらから取り出した繊維をもちいて、編(織)して形成したものを指すこととする。毛皮革はそのままで広い面がとれ、縫い合わせることで、形作ることができる。シラカ(ン)バ類(カバノキ属)などの樹皮も毛皮革に比べれば柔軟性には乏しいが、折り曲げて縫合あるいは接着して形成するものである。このようないわゆる樺皮製品も“バスケット”と表現されることが多いが、ここでは対象

とせず、細い繊維状の物を編み組みして造形したもののみを取り扱う。なぜなら、それらの用途はひろく生活に関わっており、製作には手間もかかるうえ、技術的にもヴァリエーションがあり、比較に値すると考えたからである。

2. 植物性繊維製品の用途と素材

衣・食・住・生業・精神文化など生活の全般をとおして、植物性繊維製品はさまざまな物に用いられている。殊に、漁網・敷物・容器（籠・編み袋）・結束材としての利用は、広範な地域に見られる。

製法ならびに形態や用途の違いから製品の形態を、おおまかに網類・バスケット細工類・マット類・綱類・衣類に分けて以下にその用途を示し、それぞれの素材について述べる。

・網は、主として魚を捕るための漁網の他にも、一部地域ではアザラシやクジラなどの海獣類、カモやライチョウなどの鳥類を捕るためのものもある [Jochelson 1905-08] [Prokof'yeva, Chernetsov, Prytkova 1964]。ほとんどの民族で網は利用されており、主な網の素材を表1に示した。

網を編んだり布を織ったり、あるいはバスケットやマットの結束材などとして用いるための、柔軟で細い繊維；すなわち「糸」をとるには、広い地域でイラクサが主要な素材となっていた。イラクサ科の植物のなかでもヤブマオ属やイラクサ属は、師部繊維がよく発

表1 網の素材

素 材	使 用 民 族
イラクサ	ハンティ、マンシ、ネギダール、エヴェン、ウリチ、ウデハ、オロチ、ウイルタ、ニブフ、アイヌ、イテリメン、コリヤーク、北西海岸インディアン
アサ・アマ	ハンティ、マンシ、ネギダール、ウリチ、（コリヤーク）
ヤナギ	ベーリング海エスキモー、アサバスカ・インディアン
シーダー	北西海岸インディアン
ツルウメモドキ	アイヌ
馬の尾の毛	ヤクート、エヴェン、ユカギール
皮紐	コリヤーク、チュクチ、シベリア・エスキモー、アラスカ・エスキモー アサバスカ・インディアン
クジラヒゲ	コリヤーク、アラスカ・エスキモー
臍	コリヤーク、チュクチ、北西海岸インディアン

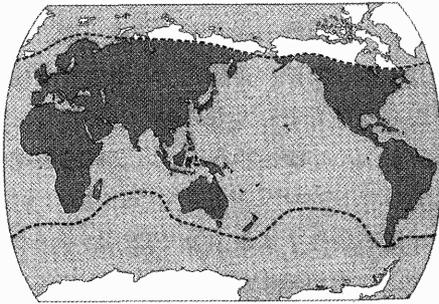


図1 Urticaceae イラクサ科の分布

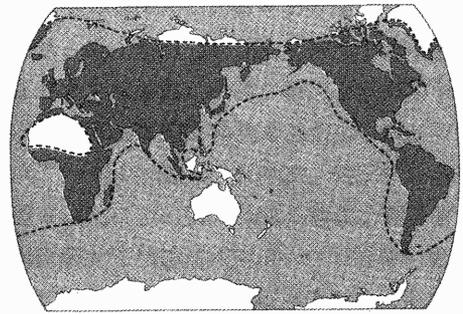


図2 Salicaceae ヤナギ科の分布

いずれも『世界有用植物事典』[堀田 1989]より

達している。ムカゴイラクサ属からも繊維をとることがある。若芽は食用となり、人間にとっては非常に有用な植物である。北方地域でもツンドラ以外のほとんどの地域に育ち、民族の分布と照らし合わせるとユーラシア大陸ではコリヤークの居住域とチュクチの居住域との間あたりに限界線が引け、北米大陸ではほぼアラスカ半島以南に自生する(図1を参照)。

北米のベーリング海エスキモーや内陸のアサバスカ・インディアンでは、ヤナギから繊維をとりだすことが知られている。ヤナギの分布はかなり北まで広がっており、新しく生えてきた枝をいくら伐っても、幹さえ傷つけなければ枯れないという習性をもっていることと関連があるだろう(図2を参照)。

コリヤークはヤナギランの茎の皮からも糸をとるという。北西海岸インディアンでは、シーダーからも糸をとる。

アイヌは、ニレ科のオヒョウ、ハルニレやシナノキの内皮から糸にする繊維をとっていた。この詳細については、衣類の部分で取り上げたい。

・バスケット細工は、主に容器として貯蔵用あるいは運搬用などに使われてきた。一般的に軽くて通気性があり、乾燥した食物などをいれておくのには適していた。中には防水性の高いものもあり、水を汲んだり漿果(ベリー類)をいれたりする容器として用いられたり、北西海岸インディアンでは水を張ったバスケットに焼けた石を入れて煮炊きにも用いた。編み方や素材の選択によって、籠よりも柔軟に仕上げた編み袋もひろく採集・運搬用、貯蔵用として使われており、コリヤークで乳幼児を背負うものなどさまざまな形態があった。

どのような使われ方をしていたのかについては、さまざまな記録から読み取れる。アイヌでは、少ない家でもアキアジ500~600本(小形は30本位、大形は25本位を単位に束ねて12束~20束位)、鱒は焼干しにして大形サラニップ(約200本入り)3~4枚を倉庫(pu)

に入れたという（芽室太、勝川ウシノ氏談、1953年渡辺仁記録）〔渡辺 1988〕。ステラーによるとイテリメンでは、出来上がったばかりの（魚の）燻製の肉をよくこすって、筵の上で乾燥させ、草で編んだ籠の中に入れる〔加藤 1986：101〕。アリユートについてもステラーは、編かごまたは樹皮製の器にカムチャツカのサケを燻したものが一ぱいになっていた、と記録している〔加藤 1986：17〕。このように、魚はもちろんのこと植物を乾燥させる際にも筵を使い、籠あるいは編み袋に蓄えた。

漉し器としての利用も見られ、北西海岸インディアンのツィムシアンでは、ユーラコンという魚の油を採取するときに魚の煮カスをバスケットにいれて重しをかけて絞ったし〔Stewart 1977：151〕、アイヌでもオオウバユリの根から澱粉を採取する際に、編袋で漉した〔アイヌ文化保存対策協議会 1969〕。

また、英語でbasket trap、日本語で「えり」などと呼ばれる漁撈用の籠ワナも、バスケット細工の一つといえる。

バスケットで広く素材とされていたのはイネ科あるいはカヤツリグサ科（特にスゲ属）で、“grass basket” といえたいこの仲間である。その他、ヤナギの細枝・根・樹皮、シラカバの根なども用いられる。北西海岸インディアンのシーダーの樹皮と根、スブルースの根が主たる材料である。また、スゲの葉は染まりやすいので、ベーリング海エスキモーではハマニンニクのバスケットに編み込んで装飾に利用された〔Fitzhugh & Kaplan 1982〕。アイヌの編み袋は、主としてシナノキが材料となっている。

これらの素材のなかでもとりわけイネ科のハマニンニクは北太平洋沿岸に広く分布し、アイヌ（特に千島）、イテリメン（カムチャダル）、コリヤーク、アリユート、ユピック・エスキモーでバスケットの基本的な素材となっている。例えば、クラシェニンニコフは、イテリメンについて次のように書いている。

海岸に沿って、ムギに似た背丈の高い帯白色の植物が生えている。…中略…この草は、ベッド・カバーリングやカーテン用のマットに編まれた。マントにもした。美しいバッグや小さなバスケットも編んだ。クジラヒゲや毛糸で飾った。草がまだ緑のうちに、魚やスイート・グラス、ヤナギラン、その他の食料を貯蔵する大きな袋に作った〔Krasheninnikov 1972：117〕。

この植物は、その形容や生育地から判断して、ハマニンニクであると考えられ、さまざまな編物類に利用されていたことがよくわかる。

・民族誌などでマットと記述されるものには、素材や編み方、形状などさまざまなタイプが含まれているが、日本でいう筵状あるいはすだれ状の編織物を取り上げる。手で素材を組み合わせていくだけでなく、簡単な機のような道具を使って、素材となる植物を細い糸で振じりとめながら繋いでいくものが多い。

主にその保温性と通気性を活かし、掛敷用として寝具・壁掛け・出入口等の風雨よけ・

乾燥作業用に利用されるほか、アイヌやベーリング海エスキモーなどで篷帆とされたり、包装材料としての利用もあった。

マットには、バスケットよりもさらに多様な素材が利用され、ハマニンニクをはじめ、ガマ、フトイ、オギ、ススキ、アシ、スゲ属、シーダー樹皮なども用いられる。特にアイヌでは多種の草が使われたことが知られている。

絵に描かれたアリュートやアイヌなどの住居の内部には、いたるところにマットが見られる。ベーリング海エスキモーの民族誌から関係部分を抜粋すると、

ノートン湾岸からカスコキウムにかけての地域の女性は、草製マット、バスケットとバッグを編む名手である。草製マットは、寝台と寝具を包むために用いられる。彼らはカヤックやウミアックの帆にも用いる。また、住居内のコーナーや寝台を隔てるカーテン代わりにも用いる。小さなマットは、カヤックの座席にも敷く。バッグは、魚・ベリーとその他の食べ物や、あるいは衣類を貯蔵するときに使われる。小さなバッグやバスケットは住居内で使う小さな道具類などを収納するために作られる [Nelson 1983]。

といった具合である。住居内外のさまざまな物に、マットやバスケットが取り入れられていたことがわかる。

・綱類として、牽引ロープや荷を負うための額帯あるいは背負縄 (carrying belt) の利用も重要である。強度の点からいえば皮紐のほうが勝るように思われるが、イラクサやツルウメモドキも木綿やジュートなどよりはるかに引張強度が高く麻と変わらぬほどであり [村井 1991 : 10]、撚糸をさらに編んだり紬ったりすれば、かなりの力に耐えられるものとなる。

アイヌではこれらの素材にツルウメモドキが良く使われ、シナノキよりも強く、つるで薪を縛るなどはアイヌに限らず広く本州でも利用されていたようである。弓弦や銚綱、男の背負い縄などと、女性の下紐にも使われた。板綴り船などの結束材としても用いられ、水に濡れると縮むため、板をかたく締めつけて綴ることのできる適材ということである。また、サケやシカの皮から作った靴を縛る紐にも使われ、寒中でも凍りつかないといわれる [萱野 1978 : 72]。

ちなみに、編んだものではないが、海草製の漁撈用の綱がアリュート [加藤 1986 : 66] や北西海岸インディアンで知られており [Stewart 1977 : 26]、大変丈夫なものであるという。

・植物製品の衣類としての利用は、これらの地域の中でも南方にあたるアイヌと北西海岸インディアンに顕著である。アイヌの樹皮や草皮の繊維を糸にして織った布「アツシ」は、基本的な衣服であった。北西海岸インディアンでもシーダー樹皮の編み布をまとっていた

し、チルカット・ブランケットは経糸にシーダー樹皮を芯にシロイワヤギの毛を巻き付けて撚った糸が用いられた。

アイヌは、ニレ科のオヒョウやハルニレの内皮から繊維をとっていた。これらはサハリンあたりが北限で、サハリンでも多くはなく、衣服にはイラクサが主たる材料となっていたことは良く知られていることである。また、シナノキ属の植物も樹皮の韌皮繊維が発達していて繊維を取るものが多い。特にシナノキは樹皮は強く耐水性があるため、本州でも縄、豊糸、シナ布に用いられた。同属のオオバボダイジュもやや性質は落ちるが、繊維は利用できる〔堀田 1989〕。ツルウメモドキからも繊維をとり、織物にも網にも用いた。

また、草や樹皮製の靴下・手袋・脚半等が、アイヌやベーリング海峡エスキモーで用いられている。草鞋はアイヌに見られ、管見のかぎりその他の地域では知られていない。夏用で、山や川に行くときなどに用いられ、ふつうはヤマブドウのつるの皮からできていた（ルロウ＝グーランによるとアイヌ式のサンダルはクルミやカエデの樹皮製という〔ルロウ＝グーラン 1992 : 33〕。ニブフがカエデなどで籠や履物、手袋を編んだ〔加藤 1986 : 232〕というが、アイヌではクルミもカエデも編物に使ったことはあまり知られていない）。本州の草鞋にもさまざまな形態があるが、アイヌのものは鼻緒がなく、紐を通す乳にあたるものが左右に6個ずつと多い〔萱野 1978 : 70〕（本州では1～4対〔宮本 1990 : 117〕）。

参考までに、編んだり織ったりの加工はせず、植物繊維をそのまま使うものとして、靴につめたりする保温材、おむつなどのための吸収材としてなどの利用があり、これらには広くカヤツリグサ科の特にスゲ属がよく使われていたようである。

以上のように、寒冷な北方地域においても植物は手に入るかぎり積極的に物をつくる素材として利用されている。食物性繊維製品は生活の必需品となっているのである。適当な植物が入手できない場合（地域）では、容器や敷物、網、衣類等には毛皮革が用いられており、網には革紐も利用されるほか、腱やクジラヒゲなどの動物性繊維が使われていた。

3. 採集・調製・貯蔵

繊維素材として用いるための植物は大量に必要とされ、採集や調整にはかなりの時間を要したと考えられる。採集時期については、素材によって適当な時期がある。草本類は主に十分に成長した秋、樹皮類は水分があがり剥きやすい春とすることができる。採集後、貯蔵に適するある段階までの処理を行うが、実際に編み（織り）を行うのは、食糧の収穫と保存・加工のピークを終えた、冬季である。

それぞれについて、関係する記述を紹介しながら、見ていきたい。

まず草本類のなかでも重要なイラクサの採集と貯蔵までの処理をコリヤークの例で示す。

コリヤーク女性は、漁撈の季節の終わった後、秋にイラクサを集め、束に縛って、貯蔵庫の下に吊って干す。冬にそれを糸にする。歯を使って、イラクサの堅い木質の茎から柔らかな繊維を引っ張りだし、棒で繊維がほぐれるまで叩き、腱の糸と同じように撚る。…バスケットや編み袋あるいは網には、4～6本の繊維を房にして、それを一緒に撚った。糸撚りは、手のひらで行われ、バラバラの繊維が一緒に撚られて長い糸が得られた。…図は、編み物用の腱の糸を巻くための木製リールを示している。似たような“かせ”は、植物繊維の糸でも作られる [Jochelson 1905-08: 629]。

アイヌでは、以下のとおりである。

エゾイラクサから繊維を取るにわ、秋枯茎を採集して、二三日乾燥し、その茎を細く裂いて、一本一本裏返しに折ってわ皮から肉をそぎ落とし、その皮の根もとを揃えて、1握りぐらいずつ束にし、一端を足に踏まえて両手の間で揉み上げて行き、こんどわ他の一端を踏まえてまた揉み上げて行く、とゆうぐあいにして、表皮を揉み落して行くうちに、繊維だけが手許に残るのである。この繊維で、糸を撚ったり、織物を織ったりするのである(幌別) [知里 1973]。

樺太の白浦でわ、秋10月になるとこの茎が枯れてしまうので、枯れてしまった頃を見はからってそれを刈りとり、その枯茎から皮を剥がした。この皮わ、1人の女で1日に3貫から5貫ぐらい(*1貫=3.75kg)採集した。採集した皮わそのまま水に漬けておいて、「ピパカハ」pipa-kax“川真珠貝の殻”の縁で荒皮をはだけてそれから乾した。乾せたらそれを冬まで貯えておき、厳冬にそれを取り出して雪の上に置いて足で踏みつけて、それからまた水に入れ、この操作を数回繰返してから、竿に懸けて10日でも20日でも放置しておいて真白な繊維を得た [知里 1976]。

イテリメンでも

この地で最も広く用いられている植物はイラクサである。アサもアマもここには育たず、目が欠けることなく漁網を作れる唯一の素材である。イラクサは9月中あるいは8月でも刈られ、束に縛ってバラガン(テント)か夏の小屋の下に干される。漁期が終わると彼らはベリーや根の食料を採集し、イラクサの調製に時間をさく [Krasheninnikov 1972]。

このように糸の調製方法には、茎から繊維を分離する時に爪・歯・ナイフなどを使ったり、柔らかくほぐして取り出しやすくするための叩き棒や、糸を撚るときに紡錘(車)を利用したりと使う道具類には若干の違いが見られるが、工程はほぼ同様であり、雪に晒すとより白い繊維を得ることができた。

次に、バスケット作りにおいて重要なハマニンニクの採集から貯蔵までの処理をみてみたい。コリヤークのバスケット細工の素材と採集については以下のものである。

ここでは、編んだバッグやバスケットの製作に限って記述する。服を作るように、

編み物は女性の大きな仕事であり、それは特に海岸コリヤークで発達している。編み物の材料は様々である。ヤナギの異なる種の根、ハマニンニク、ヤナギラン、イラクサ、トナカイの腱で作った糸、交易で得た撚糸が使われた。

ヤナギの根は、編む前に、湯に浸し、柔軟で白い素材にする。ハマニンニクの茎は、秋に採集する。この植物は、日当たりのよい川岸の斜面に成育し、しばしば人の背丈ほどにもなる。この草を三つ編みにし、これらの束を貯蔵庫の杭に掛けて置く。可食のヤナギランの外皮は技巧的な用途で使われる。芯は取り出して食用にされる。イラクサから糸をとるように、草皮から糸を撚る。ヤナギランの冬の備えは、秋に採集され、束にして保存される [Jochelson 1905-08 : pp.629]。

このように、イラクサもハマニンニクも夏～秋に刈られ、束にして屋根の下に干して乾燥させられるのである。

また、スゲは多くの民族で、晩夏の青味が残る時期に刈り取られ、梳き櫛などで細く裂かれ、束にして保存された。

草本類の採集はいくつかの民族誌で「漁期の後」という記述が見られ、夏の終わりから晩秋の雪が積もる前ということになる。この時期、漿果類なども採集される。植物が豊富で雪が遅い北海道アイヌの場合、漁が盛んになる前の若芽の頃に茎葉を食用とする植物を採集し、漁の終わった後、漿果や木の実類、霜の降りる頃にイラクサが刈られる。イラクサは刺毛にギ酸を含み触ると痛痒いが、この頃のイラクサは触っても痛くならないという [更科 1976]。ハドソン湾の東側ラブラドル・エスキモーやベーリング海峡エスキモーでは、バスケットに編む草は、春、雪が残っている頃にとると、柔らかくて加工しやすいという [Myers 1980 : 146 ; Fitzhugh & Kaplan 1982]。ただし、春先の最も食料が不足する時期に、物を作る材料としての草を大量に採集していたかどうか疑問ではある。

樹皮類は、真冬とか落葉の頃という記述も一部に見られるが、一般に初春～初夏が水分があがって皮が剥ぎやすいとされ、夏になると繊維が弱くなるという。

オヒョウの例で樹皮の剥ぎ方を示すと、幹の下の方に切り込みを入れてから上に向かってやや剥き上げて手掛かりをつけ、両手で持って剥き上げる。このとき皮を揺さぶったりねじるようにして剥ぐ方法もある。その場で内皮と外皮をはがして分け、内皮だけ持ち帰る。その後、内皮を温泉か沼などに数日から数週間浸し、薄く剥がれるようになったら、川で水洗いし、乾燥させる。これら植物の採集時期を表2にまとめたので参照されたい。

樹皮剥ぎに関連して、知里がアイヌの性的分業について述べているので、以下に示す。

さて樺太アイヌの生活を見る時、気をつくことは男が非常に勤勉な点である。…中略…その他に、北海道では女の仕事になってる薪木取りも、ここでは男がする（オヒョウの樹皮剥ぎも山の仕事なので女性はしない）。北海道では男子は平素炉辺で終日煙草を燻しながら来客と閑談し、時々狩猟に従ふ程度であるのに反し、婦人はよく働き…中略…。樺太では冬が長く、然もそれが酷寒凜烈であるために、生

表2 植物の採集の時期

草本類

植物名	採集時期(民族)	文献
イラクサ	霜が降りた後(北海道アイヌ)	福岡 計良
〃	秋10月・茎が枯れてから(サハリン・アイヌ)	知里
〃	9月中・8月でも(イテリメン)	Krashennikov
〃	漁の季節が終わった秋(コリヤーク)	Jochelson
〃	晩夏から初秋(北西海岸インディアン)	Stewart
〃	10月に(北西海岸インディアン)	キュー
ムカゴイラクサ	青いうちに刈る(アイヌ)	福岡
〃	秋に茎が枯れてから(アイヌ)	更科
ヤナギラン	秋(コリヤーク)	Jochelson
カヤツリグサ科 スゲ属	茎葉を夏(7月頃)に、刈り乾かしておく(アイヌ)	知里 計良
〃	7月か8月上旬新鮮なうちに摘み、茎と根は食べ、葉を乾燥しておく。(ベーリング海エスキモー)	Fitzhugh and Kaplan
ガマ	お盆過ぎから10月・十分成長した頃(アイヌ)	福岡 計良
フトイ	9月から10月葉が成熟した頃(アイヌ)	計良
ハマニンニク	夏刈り(千島アイヌ)	菅江
〃	まだ青みの残っているうちに(イテリメン)	Krashennikov
〃	秋(コリヤーク)	Jochelson
〃	秋(初霜の後)と翌春(ベーリング海エスキモー)	Fitzhugh and Kaplan

木本類

オヒョウ	春雪の残る頃・年によって7月に剥ぐこともあるが、夏木は繊維が弱い(アイヌ)	知里 福岡
〃	春の彼岸の樹液のぼる頃と秋の落葉の頃(アイヌ)	更科
シナノキ	5～6月が良く7、8月まで(アイヌ)	福岡
ツルウメモドキ	12～3月(アイヌ)	福岡 計良
シダー	内皮は7月(北西海岸インディアン)	キュー
トウヒ	根は春か夏(北西海岸インディアン)	キュー
ヤナギ	晩春か初夏・樹液の流れが早くなる頃(タナナ・インディアン)	Kari

*ちなみにシラカバ類は「5、6月の樹液を集めた後(タナナ・インディアン [Kari 1991])、「春先の堅雪の頃(アイヌ [福岡 1993])」とされる。

活資料は総て短い夏季の間に確保しておかなければならないからである。樺太では男女協心協力生業に従事してゐる〔知里 1973〕。

サハリンでは、イラクサ繊維が織物の主たる素材であり、樹皮に比べると手間のわりに得られる糸の量が少ないものと考えられる。知里は生業カレンダーの中で、イラクサ採集を大きくとらえており、秋冬の女性の労働量はかなりのものがある。もちろん、物をつくるための素材採集や製作の仕事に限らず、過酷な自然環境の下では男女の分業が極小化されている。群れを作らないムースが分布する地域に暮らすヘヤー・インディアンと群生のカリブーに依存するチペワイアン・インディアンという近隣の民族でも、ヘヤーの方が分業が極小化していることが指摘されており〔原 1989: 434〕、自然環境の違いを考慮すると知里がもったこの印象は、アイヌという同じ民族ながら、納得できることである。

素材となる植物の採集と調製、貯蔵については、以上のような季節的サイクルをもっている。漁撈に大きく依存している北太平洋沿岸地域において、大量に必要とされる植物の採集が、サケ・マスという集中的な漁の時期とうまくずれているのも興味深く、利用に関係する条件のひとつとも思われる。

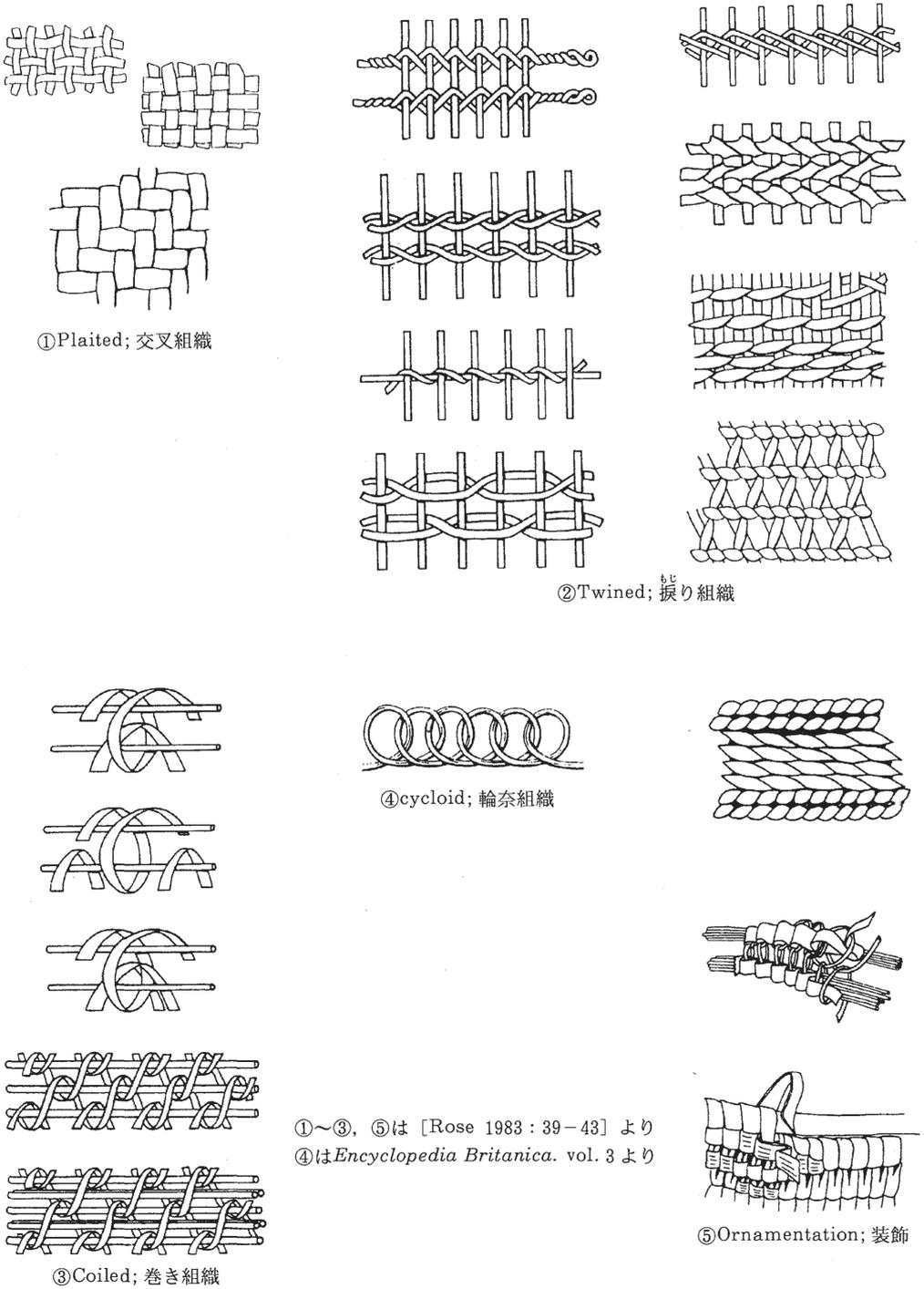
4. 編織の技法

編み物は、人類の基本的な生活技術の一つであり、きわめて早い時期に知られていたとされる。R. G. ローズによれば、北米では紀元前7,000~9,000年ころのバスケットも発掘されており、「振り組織」「巻き組織」の技法が見られたという〔Rose 1983: 44〕。

バスケット細工の製法技術は、大きく4つに分けることができる〔Rose 1983: 39-43; 吉本 1987: 23; *Encyclopedia Britanica* vol.3〕。すなわち、①Plaited; 交叉組織、②Twined; 振り組織、③Coiled; 巻き組織、④cycloid; 輪奈組織に加え、異なった素材をいずれかの方法で編み込むOrnamentation; 装飾のヴァリエーションがある(図3参照)。

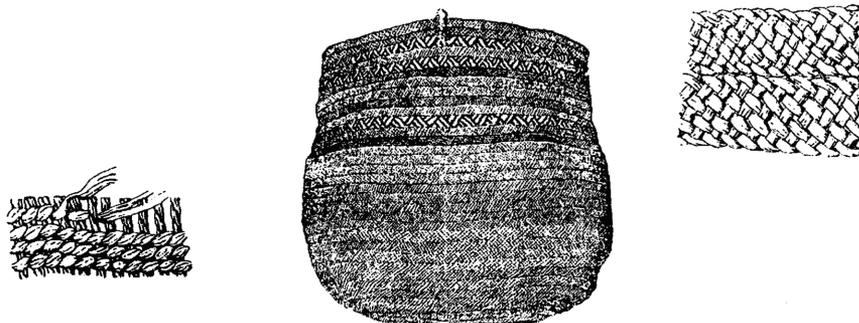
すべてのバスケット細工はいずれかに分類され、北太平洋地域では前の3種類の技法が用いられる。少なくともアイヌやコリヤークのバスケット細工には3種類すべてが見られ、その他の民族でも複数の編み方が知られている(図4参照)。技法自体の数が少ないため、それらを比較して地域的な特徴を挙げるのには限りがあるように思われるが、ローズによれば、次のように概括される。

北アメリカでは、主なバスケット編みの技術のすべてが、ヨーロッパ人による発見の時点で行われており、その分類は厳密なものでないが、多くのグループが一種類以上のバスケットを使用していて、交叉組織は北アメリカの東部と南東部に支配的で、巻き組織は南西部、振り組織は北西部というように、おおまかに概括することができる。交叉組織は東部で最も一般的である一方で、(南西部のプエブロ・イン



①～③, ⑤は [Rose 1983 : 39-43] より
 ④は *Encyclopedia Britannica*. vol. 3 より

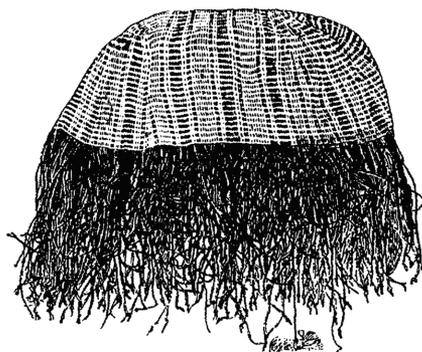
図3 バスケットの技法



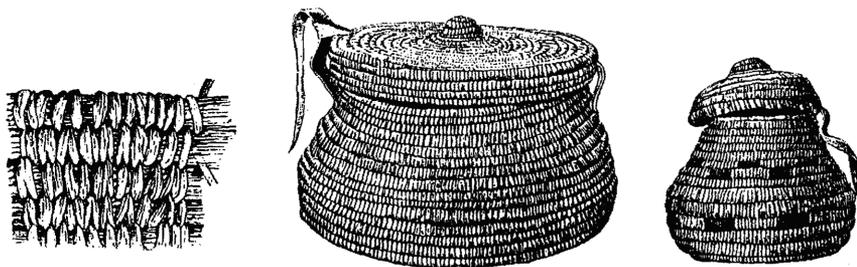
a 交叉組織で編まれたバスケットとその拡大図



b 振り組織で編まれた漿果用バスケットとその拡大図



c 振り組織で編まれたバッグとその拡大図



d 巻き組織で編まれたバスケットとその拡大図

図4 コリヤークのバスケット [Jochelson 1905-08] より

ディアンがバスケットや板やふるいを運ぶような道具として用いるのと同様に) 北アメリカ西部と北西海岸のいくつかの部族でも用いられている。最も広く(しかし独占的ではなく)北アメリカの西部で用いられた振り組織は、特に海岸地域の住民にとって重要であり、アリューシャン列島から南アラスカ、ブリティッシュ・コロンビアへ、そしてワシントン(州)、オレゴン、北カリフォルニアとグレート・ベイスンにまでわたっている。巻き組織は南西部とカリフォルニアの南部で支配的である一方で、アラスカやブリティッシュ・コロンビアの内陸、ワシントンとグレート・ベイスンにも広がっている [Rose 1983 : 44]。

以上のように、北太平洋沿岸に最も特徴的なのは、北西海岸インディアンやアリュートのバスケットによく見られる、目の細かい振り組織であったようである。イヌイトの巻き組織バスケットは現在よく見られるものだが、これは比較的新しいものとされている。1896-7年にネルソンが収集した巻き組織バスケットは、技芸としてまだ未熟な状態であった。特徴として、草製の振り組織バスケットは非常に柔軟性があり、つぶしたり巻いたりできるが、巻き組織は形がくずれず内容物を壊さないが、持ち運びやしまうのには小さくならないので不便な面もある。しかし、巻き組織のほうが早く簡単に作れる [Fitzhugh & Kaplan 1982 : 129]。これらのことから、量産できる巻き組織バスケットが商品としての需要にかなない、普及していったと考えられている。ヤナギやシーダーの根を編んだ巻き組織バスケットは、北部や内陸のイヌイトには少なからず見られたようだが、ゴールド・ラッシュ以降の土産としての需要が巻き組織バスケットを一般的にしたという [Rose 1983 : 45]。ハドソン湾東部のラブラドル・エスキモーのバスケットや、ヤナギ製の目の粗いバスケットくらいしか作らなかったといわれる北アラスカのイヌイトでのクジラヒゲ製のバスケットも、商品として復興あるいは開発されたものである [Myers 1980] [Lee 1983]。

若干本筋からそれるが、近現代における技術の伝統と伝承に関して、ローズは二民族の状況を端的に紹介している。まずユピックについては、1898年にノームの近くで金鉱が発見された後、巻き組織のバスケットの製作が土産物市場によって大きな刺激を受け、バスケット製作者たちは現金経済によって創出されるこれらの需要に応え始めた。こうした結果、商業的な染料が自然物の染料にとって代わり、赤やオレンジや青、黒などに仕上げられた花や動物の文様を編み込んだものが一般的になり、19世紀のうちは、秀逸な振り組織のバスケットを作り出していたが、その技術はあっという間に忘れ去られた(と信じられ)、ますます多くのバスケット製作者たちが旅行客との交換のために巻き組織のバスケットを作ることに専念した [Rose 1983 : 45] というのである。アリュートについても、ロシア人との接触以後、アリュート女性は色の付いた絹糸やきれいな毛糸などの素材をバスケットに取り入れて、かぶせたり刺繍まがいの技法で初期の交易品によって影響を受けた花の文様を作り出した。最もポピュラーな形は、円筒形の容器(container)と、カー

ドや煙草をいれるふたの分かれた小さなケースである。後者の多くは1898年のノームのゴールド・ラッシュ以降に作られるようになったもので、皮肉なことにそれはバスケットの伝統を生きつづけさせることに一役買ったのであった [Rose 1983 : 46] 。

編み袋もバスケットの技法にほぼ分類されるが、インディアンには、1本の糸をかぎ針で編んでいくような輪奈組織のものも少なくないようである。ちなみに、アサバスカ・インディアンには、ウサギの毛皮を幅1cmほどの紐にしてかぎ針編みの方法で手で編む服がある [原 1989 : 180 ; Hail 1989 : 279-281] 。管見のかぎり旧大陸やイヌイトには同様のものは見当たらず、その起源や分布については興味深いものがある。

マットの製作方法については、北西海岸インディアンの以下の事例が知られている。

マットの製作工程は、その外観と同様、北西海岸全域で全く同様の特徴を呈していた。マットの素材はレッドシダーの内皮か、もしくはそれより遥かに柔らかいイエローシダーの内皮であり、どちらの木が用いられるかは、どちらの木が多いかという地理的条件に応じて異なった。シダーの樹皮は適正な太さと幅の糸に分割され、それらの糸はごくふつうの格子状に編まれたり、綾織りにされたりした。織物作業では、女性が座って仕事をするのに都合のよい高さに横棒を設定し、マットの縦糸となる樹皮の糸を真ん中から折ってこれに吊るし、ぶら下がっている両端を同じ長さにした。このぶら下がっている縦糸を固定しておくために、二本の樹皮の糸が横棒の上縁部沿いに編み込まれた。織物作業の過程で素材に適度な湿気を与えることが必要であったので、水の入った皿が常に手近に置かれていた。

フレイザー川沿いの南部流域では、マットの製作に葦を用いた。この場合、葦と葦は一定の間隔をあけて直接結び合わされた [キュー 1990 : 38] 。アイヌでもほぼ同様の機が使われ、経糸の端には石のおもりを巻き付けておいた。

アイヌのアツシは、この地域でもっとも発達した織物と考えられ、経糸を固定する機で作られている。この技術は、道具の名称などからも本州から伝播したものとされている。アサバスカ・インディアンにクイル（ヤマアラシのとげ）を織る弓状の道具があり、これは経糸を固定しているが、1本1本経糸は緯糸と直接交叉しておらず、経糸に沿って編み込まれるクイルが緯糸に対して交叉しているというものである [Duncan 1989] 。北西海岸インディアンのチルカット・ブランケットは、基本的に振り組織で編まれている。織り機はもちいるが、経糸はいくつかの房に分けて下げたままである [Samuel 1982] 。以上のように北方地域では「織物」と呼べるものは大変限られている。

この他、アイヌの草鞋の編み方は、シナノキの縄を左右の足の親指と左手の指にかけて4本の経糸を作り、その4本の芯縄を交互にすくいながらブドウづるの皮を左右に通して

底を編み、途中でつる皮に撚りをかけて紐を通すための耳を出しておき、最後に内側の2本の芯縄を引きしぼって形を整える〔萱野 1978:70〕。作り方の基本は本州のものと同じである。

5. 考察

これまで、大まかではあるが、北太平洋沿岸地域の編織物の概要について見てきた。編織物が発達していた地域における事例については容易に知り得るが、逆にあまり利用されなかったことの要因を検証することは困難である。

例えば、編んだマットやバスケットを持たない、カナダ中部極北圏のイヌイトの魚や肉の乾燥や保存がどのように行なわれるかということ、ひらいた魚を砂や土がつかないように岩や草の上に広げたり、石塚の間にわたした綱に掛けて干したりする〔スチュアート 1992, 1993〕。カリブーの肉は現在では板の上に干す〔スチュアート 1993〕。貯蔵には、やはり石組み貯蔵施設が使われる。生干にしたアザラシの肉を脂身と一緒にアザラシの皮で作った袋に入れて保存することもある。油漬けの魚や肉は保存が効くという〔バーチ 1991〕。このように天然の冷蔵庫のような気温の低いツンドラの地では、カラカラに干したり貯蔵の際に通気性に留意したりする必要が、さほど無いようである。

なぜ、北太平洋沿岸に編織物文化が発達したのかについて要因を挙げるとすれば、まず環境として植生が比較的豊かで繊維素材となる植物が多量に採集できたことが考えられる。なかでも比較的温暖なアイヌと北西海岸インディアンでは衣類に用いるにさえ十分であった。内陸の森林帯のようにシラカバ類が多量に採集できるならば、容器を樺皮で作る方が簡便であろうが、どの地域でも入手できるというものではない。また、木器は鋭利な刃物が十分で無かった頃には、製作にはかなりの労力を要したものと考えられる。クラシェニンニコフは1735-41年に見聞したことを次のように記述している。

ロシア人が到達する前は、カムチャダルは金属の代わりに骨や石器を使っていた。
…中略…これらの道具で丸木船やボウルを彫ったが、それには非常に時間がかかり、船を作るのに3年、大きなボウルには少なくとも1年を要したので、我々が金属細工の最も美しい一品に認めるのと同様の価値を彼らは船や大きな容器に認めていた〔Krasheninnikov 1972:216〕。

バスケットやマットなどの発達のもう一つの理由は、食料を採集・運搬し乾燥して保存する用具として、都合の良いものであったからだと考えられる。渡辺仁は「北太平洋文化圏構想」のなかで、極東から(北米)北西沿岸までの共通性として木製(木彫)食器の発達を挙げている。木製食器の発達は、直接には男性の技芸としての彫刻の発達と関係し、また間接的には定住生活に伴う社会生活の複雑高度化と関係があり、このような食器の発達は狩猟採集民はもとより未開農耕民にも稀な現象としている〔渡辺 1988〕。渡辺が概観

するように、定住生活によって北太平洋沿岸地域は豊かな物質文化を持っている。確かに、現在知られるこの地域の物質文化のなかで、木器は「儀礼用ないし供宴用食器」としてデザインの的にも大変発達をとげている。しかし、クラシェニンニコフのいうように木器を作るのに相当な時間を要するのであれば、豊かな定住生活を支えるサケ・マスという集中的（一時期）な食糧の確保とその他魚介類、植物性食物の加工や保存に便利な什器は、作りやすさや扱いやすさのうえでも、バスケット細工であつたらう。

さらにこの地域では採集できる植物や貝類なども多く女性や子供・老人の労働が大きな役割を持つと同時に彼らを養うに充分であり、季節的に集中する漁の成果によって、家族内で分業をする余裕があつたことなども理由として十分に考えられる。ラフリンは、アリューシャン列島では利用可能な多様な資源があり、アリュートの女性や幼児、老人も採集による効果的な経済活動を行ってきたとし、その大部分は海浜地帯でまかなわれ、「老女が日の出から日没まで歩ける範囲に塊根やカゴ細工用の草があれば、アリュート人が必要とした陸上の資源をまかなうことができた。」と述べている [ラフリン 1986: 89]。ヨヘルソンは、「海岸コリヤークは、植物やその他の繊維からのバスケット編みを約束された部族のほんの一部である。トナカイ・コリヤークの女性は、時間が無く、彼女らのくらす大きな寒いテントは、冬に材料を準備し、バスケットを編むには適していない。トナカイ・コリヤークの女性の持ち物は、皮でできた裁縫道具入れと、海岸のグループと交換したバスケットと両方がある。」 [Jochelson 1905-08] と述べており、定住生活と移動生活の違いによる、編物製作の在り方を示している。このようにこれらの編織物はまた、隣接する住民・民族との間で交易品としても価値のあるものだった。

さらに、今回あまり触れることができなかつたが、この地域に非常に精緻な編織物があつたのは、それらが儀礼に深く関わっていたからとも考えられる。アリュートでは死者を包むデスマット、北西海岸インディアンではポトラッチなどに重要な帽子等が挙げられる。これらはデザインの的にも大変芸術性の高いものであるといえよう。

編織物の分布及びそれぞれの文化における位置付けについて、さまざまな民族誌に現れる植物製繊維製品の利用、素材、採集、加工技術に関して比較してきた。このような物質文化研究においては形状や材質、技法などを比較して編年や地理的分布を検討することも重要ではあるが、むしろそれらのものが生活全体のなかでどう位置付けられているかを十分に知ることがより重要であろう。

特に、自然環境の条件とともに女性の仕事のサイクルとその量に、編織物への傾斜を決定する変数があると考えられる。知里真志保は、サハリン東海岸のアイヌについて「冬は女の季節と云はれてゐるが、全くその感が深い」と述べている [知里 1973]。北方地域では普遍的に、編織物は女性の冬の仕事である。

ヨヘルソンが海岸コリヤークとトナカイ・コリヤークについて指摘しているように、隣

接する地域でも自然環境と生業・生活サイクルによって、物質文化にははっきりとした差異が認められる。アイヌでも北海道とサハリン、千島では編織物だけを見ても違いがある。

以上のことから、基本的に女性の役割である編織物の文化の在り方については、素材の入手や技術の伝播といった側面のみならず生業や性的分業、近隣グループとの交易関係などが、強く関与していることが示唆され、今後、これらが物質文化にどのように反映されているのかを検討していきたい。課題としては、人口に占める女性の比率が、狩猟やトナカイ飼育を生業の中心とするグループと漁撈を中心にするグループの間で異なるのかどうかや、女性の労働力と食料供給の面などと関連して、世帯の大きさ（核家族か拡大家族か）や近隣の民族との交易（補完）関係などが考えられる。

もちろん女性の関わる物質文化に限らず、ものを作る素材としての利用とそれに関わる仕事量は、もっと調べられる必要がある。各民族において、生業カレンダーや食料の量・総エネルギー量などを作成したり算出したりする努力に比べて、物を作るための行為は総体的な研究が少ないように思われる。自給自足的な生活を送る北方地域の諸民族が、物を作るのにかける労力は相当なものはずである。

最後に、現在目にするのできる物質文化は、先住民が欧米人や、あるいはアイヌにおいては日本人との接触を密にするようになってからのものであることを改めて指摘しておきたい。工芸品として売られるようになったことで多くの実物が現存し、技術が伝承される一方で、伝統的な技法や素材とは異なる新たな物質文化が生まれていることにも注目して、研究をすすめるなければいけないだろう。

参考文献

アイヌ文化保存対策協議会編

1969 『アイヌ民族誌 上』 第一法規出版

バーチ、アーネスト・S, Jr

1991 『図説 エスキモーの民族誌』 スチュアート ヘンリ訳 原書房
知里真志保

1973 「樺太アイヌの生活」 『知里真志保著作集』 第3巻所収 平凡社

1976 『知里真志保著作集』 別巻 分類アイヌ語辞典・植物篇 平凡社

DUNCAN, Kate C.

1989 *Northern Athapaskan Art: A Beadwork Tradition*. Douglas & McIntyre, Toronto

FITZHUGH, William W. and Susan A. Kaplan

1982 *inua; spirit world of the bering sea eskimo*. Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

福岡イト子

1993 『アイヌと植物』(旭川叢書第21巻) 旭川振興公社

HAIL, Barbara A. and Kate C. Duncan

1989 *Out of the North*. Haffenreffer Museum of Anthropology, Brown University, Rhord Island

原 ひろ子

1989 『ヘヤー・インディアンとその世界』 平凡社

堀田満 他編

1989 『世界有用植物事典』 平凡社

JOCHELSON, Waldemar

1905-08 *The Koryak*. American Museum of Natural History, Memoir Vol.6

KARI, Priscilla R.

1991 *Tanaina Plantlore: An Ethnobotany of the Dena'ina Indians of South-central Alaska*. Alaska Native Language Center.

加藤九祚

1986 『北東アジア民族学史の研究』 恒文社

萱野 茂

1978 『アイヌの民具』 すずさわ書店

計良智子

1995 『アイヌの四季 フチの伝えるところ』 明石書店

キュー、D. P. E. ゴッダード

1990 『北西海岸インディアンの美術と文化』 菊池徹夫・益子待也訳 六興出版

KRASHENINNIKOV, S.P.

1972 *Exploration of Kamchatka 1735-1741*. Oregon Historical Society

ラフリン, ウィリアム

1986 『極北の海洋民 アリュート民族』 スチュアート ヘンリ訳 六興出版

LEE, Molly

1983 *Baleen Baskery of the North Alaskan Eskimo*. The North Slope Borough Planning Department., Barrow.

ルロワ=ゲーラン, アンドレ アルレット・ルロワ=ゲーラン

1992 『アイヌへの旅 -北海道 1938年-』 山中一郎訳 大阪文化研究会

宮本馨太郎

1990 『民具入門』 慶友社

村井不二子編

1991 『アイヌ衣服の復元的研究』(科学研究費報告書) 昭和女子大学

MYERS, Marybelle ed.

- 1980 *Things made by Inuit*. La Federation des Coopératives du Nouveau-Québec, Québec

NELSON, Edward W.

- 1983 *The Eskimo About Bering Strait*. Smithsonian Institution Press, (1899) Washington

PROKOF'YEVA, E.D., V.N. Chernetsov and N.F. Prytkova

- 1964 *The Khants and Mansi*. Levin, M.G. and L.P. Potapov ed. *The Peoples of Siberia.*, The University of Chicago Press.

ROSE, Roger G.

- 1983 *North American and Pacific Basketry: Some Perspectives*. In Suzi Jones ed. *Pacific Basket Makers: A Living Tradition*. University of Alaska Museum, Fairbanks

SAITO, Reiko

- 1995 *Use of Fur and Leather in the Arctic. The Proceedings of the 9th International Abashiri Symposium: Peoples and Cultures of the Tundra*. Association for the promotion of Northern Cultures. Abashiri.

SAMUEL, Cheryl

- 1982 *The Chilkat Dancing Blanket*. Pacific Search Press, Seattle.

更科源蔵・更科光

- 1976 『コタン生物記 I 樹木・雑草篇』 法政大学出版社

スチュアート ヘンリ

- 1992 「ネツリック・イヌイトの漁撈：夏の築漁を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第1号 北海道立北方民族博物館

- 1993 「ネツリック・イヌイト社会における春の生業 - 5～6月のカリブー猟と漁撈を中心に -」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第2号 北海道立北方民族博物館

STEWERT, Hilary

- 1977 *Indian Fishing: Early Methods on the Northwest Coast*. University of Washington Press.

SUTTLES, Wayne

- 1990 *Environment*. W. Suttles ed. *Handbook of North American Indians. Vol.7 Northwest Coast*. Smithsonian Institution, Washington

渡辺 仁

1988 「北太平洋沿岸文化圏 -狩猟採集民からの視点 I-」『国立民族学博物館研究報告』13巻2号 国立民族学博物館

吉本 忍

1987 「編物」石川栄吉ほか編『文化人類学事典』弘文堂

Encyclopedia Britanica, Inc.

1963 'Basket' *The New Encyclopedia Britanica*. vol.3 : 244-247